感想評　2016・2・7 公演　37 回 kyoto 演劇フェスティバル参加作品
京都放送劇団　放送劇「扉の向こうで」

評　荒木昭夫（京都児童青少年演劇協会）

お見事でした。

「扉の向こうで」という放送劇が既にあり、その放送劇を放送したときの姿を今一度ここで私たちに見せていただけるのか、と想定して、着いて行ったのですが、後の緞帳前の「幕間トーク」で、その放送劇台本もまた、今回この日の舞台のために、と書き下ろされた創作劇だと知りました。

だから、お見事！　と感銘したのです。

いま私たちの眼前で演じられている「この放送中の劇」を、演じて居られるこの声優さんたちを、正に、その登場人物の「白川久子」であり、「岡崎未幸」てありして、放送劇＝ラジオドラマの「物語」の展開を見つめ、聴き入っていたのでした。

その、はらはら、どきどき。この「轢き逃げ事件」の展開を、その犯人捜しを、観衆は、聴衆は、つまり私たちは、自分の中で、追っかけていたのでありました。

突然、現れて、部屋の中に入ってきたみゆきさんは、雪山の峠近くで、車がえんこして、携帯電話に電気を入れさせて、と懇望しました。

それはさぞお困りでしょうと快く中に入れる、一軒家でお店を開く、久子さんの暮らしにも、私たちは心を惹かれていくのでした。眼前で交わされる二人のことばを、ひと言たりとも聴き逃すまいと集中します。

お茶を入れる音。雪道を歩く音。みな手作りの音です。聴衆であり、また

観衆でもある私たちは、こうしてこのラジオドラマのお話に引き込まれていくのでした。

一人住まいの筈のお母さんの台所に男用の湯飲み茶わんが一つあるのを、みゆきさんが見つけています。そしてこの一軒家の主の久子さんの奥の部屋に、誰かが居るのかも知れないと想像すると、ぞぞっと背中に冷水が走ります。そういえば、この劇の題名は・・・「扉の向こうで・・・。」でありました。

「扉の向こうで」息を潜めて隠れている久子の息子。・・・が居るのかも知れない。うまい「劇づくりの構築」でした。劇の終末で、みゆきさんが轢き逃げ事件の犯人を追う刑事であったことを私たちは知ることになります。誠実に生きること。逃れられない苦痛に、誰もがさらされていること。厳しく正しく生きることを、優しく諭される短編に、八五歳の私は泣きます。

いいものを見せて頂いて、ありがとうございました。